

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32690

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15814

研究課題名(和文)国際看護教育における「文化コンピテンス」のアセスメント手法の開発

研究課題名(英文)Cultural Competency Scale for Nursing Students in Global Nursing Education

研究代表者

忍田 祐美(Oshida, Yumi)

創価大学・看護学部・助教

研究者番号：00721135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は「文化コンピテンス」アセスメントツールを開発し、看護学士課程の学生の「文化コンピテンス」を測り「文化コンピテンス」修得の為の教育プログラム開発に資する根拠と、修得プロセスにおける課題を提示することであった。初めに既存のアセスメントツールを用いて国際看護研修参加学生を対象にパイロットテストを行い。さらに学生のアクティブラーニングを通しての国際看護教育の経験を質的に分析し論文として発表した。また全国の看護学士課程のカリキュラムポリシーと国際看護教育科目の目的をシラバスより抽出し「文化コンピテンス」の概念の分析を行い、尺度が測定すべきデータとし尺度開発に取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop a scale that measures cultural competence of the undergraduate nursing students in Japan, and to provide evidence for effective global nursing education. First, we have used a preexisting assessment tool to assess nursing students who participated in a global nursing training course as a pilot test. Also, we have published a research titled, "Learning Experiences with Active Learning Method Applied during the Early Years of Undergraduate Nursing Students: Through Global Nursing Training Course in the Philippines" to describe the learners experience through a global nursing education in sequence. In addition, we have conducted a concept analysis through analyzing and describing the content and purpose written in syllabus of global nursing education provided in undergraduate nursing program in Japan to use as data that the scale should measure.

研究分野：国際看護

 キーワード：文化コンピテンス 異文化看護 国際看護教育 尺度開発 Nursing Education Cultural Competency
Nursing Students Scale

1. 研究開始当初の背景

法務省の統計によると、平成25年12月末現在わが国の在留外国人数は、206万6445人で、前年度末に比べて3万2,789人(1.6%)の増加となっている(2014)。また、新規入国者の増加と共に外国人の構成の多様化が顕著になっていることが指摘されている。外国人患者による我が国の医療施設の利用は増加しているにも関わらず、「文化・習慣の違い」が外国人患者受け入れにあたっての課題であることが医療従事者側のアンケート調査により明らかになっている(三菱UFJリサーチ&コンサルティング、2012)。一方で、全国の看護学部を有する国公立および私立大学は200校を超え、国際看護科目を提供している大学の増加は有るものの、効果的な国際看護教育プログラムモデルの開発に取り組んでいる大学は少なく、国際的な視野を持って看護ケアを提供する能力である「文化コンピテンス」を獲得するプロセスを測定し、学習ニードを教育目標として取り入れようとして行くことは喫緊の課題となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「文化コンピテンス」アセスメントツールを作成し、看護学士課程に学ぶ学生らの初年次と4年次における「文化コンピテンス」を測り、看護学生の「文化コンピテンス」修得の為の教育プログラム開発に資する根拠と、修得プロセスにおける課題を提示することであった。

3. 研究の方法

トライアングレーションデザインを用いて「文化コンピテンス」を測定する尺度を開発し、研究者の所属する看護学部生80名の1年次と4年次の「文化コンピテンス」を測定する。因子分析(主因子法、バリマックス回転)によるカテゴリー分類と信頼性分析(クロンバック係)を実施する。海外研修と事前学習後に半構成的面接および、フォーカスグループインタビューを通して国際看

護教育を受ける中で、「文化コンピテンス」を育む学びのプロセスを質的に分析する。さらに全国の大学の国際的な視野を育む教育についてのカリキュラムのポリシーの記述内容と科目のシラバスに記載されている目的から「文化コンピテンス」の概念を分析し尺度の測るべき属性を得る。それらのデータを基に「文化コンピテンス」の修得の為の看護学士課程における、海外研修を含む教育プログラムモデルに資する根拠を提示する。

4. 研究成果

平成27年度は、まず研究者の所属する大学の看護学部において、国際看護研修に参加した学生の学びの特性を考察し、学習ニードのアセスメントを行った。具体的には平成26年度に行われた研修に先立ち行われた6ヶ月間の事前学習およびカリフォルニア大学サンフランシスコ校においての10日間の研修に参加した学生の学びの振り返りを記述した7名の学生によるポートフォリオの内容を質的に分析し、学びの特性の類型化を試みた。分析の結果、「異文化理解と尊重」、「高度な看護ケアの実践」、「将来の看護界のリーダーとしての自覚と誇り」、「国際的に活躍する意味」、「言葉に関する学び」、「他者への理解と協働」が抽出された。研修参加を通して学生は先進的な医療と看護ケアの提供の中で異文化理解を深めながら、自己の可能性を自覚していくプロセスを培ったと推察される。成果は第30回日本国際保健医療学会学術大会2015の一般演題として発表された。

また研究者は、平成27年度に行われた国際看護研修の行程の一部に参加し、現地における学生の学びの過程を視察し、カリフォルニア大学サンフランシスコ校において異文化コンピテンスについての講義を聴講すると共に、教授らにインタビューを行い、より効果的に看護学生が「文化コンピテンス」を育んでいくプロセスを学生ニードに基づいて調査を行った。

さらに看護学生の「文化コンピテンス」を適切

に測定するツール開発の第一段階として、既存の「文化コンピテンス」アセスメントツール(Raw, 2003)を用いて、国際看護教育プログラムの一貫となっている国際看護研修に参加した学生28名に対してパイロット・テストを行った。

平成28年度に研究者が実施した成果としては大きく二つあり、一つは、米国での教育実践の視察と米国看護大学の研究協力者へのインタビューによるデータ収集を行ったことである。もう一つはこれまでの研究成果を創価大学看護学部紀要(2017)に発表したことである。具体的には、日本の某私立大学看護学部学士課程初年次に学ぶ看護学生が、異文化理解を深めることを目的の一つとして実施された国際看護フィリピン研修とその準備を含めたシークエンスによるアクティブ・ラーニングを通して、どのような経験を積み、異文化理解力を深める学びがあったかを探った。対象者は本研究の参加に同意した28名(19歳から35歳までの4人の男子学生と24人の女子学生)とした。学習者はアクティブ・ラーニング法を用いた学習経験を通して関連知識を増やし、批判的考察能力を高め、学習に対するモチベーションを向上させ、困難な課題を避けずにチャレンジする学習態度へ変容していたことが明らかになった。事前研修より研修に至るまでのシークエンスによる学びの深化が、学習者がより高いレベルの課題を乗り越える力を高め、将来の志を果たすための目標形成を促した。また、国際看護学フィリピン研修の参加者らの記述したポートフォリオから、文化コンピテンスの属性として『異文化間に存在する問題の認識』、『自らの文化に対する気づき』、『希求を基盤としたプロセス』、『質の高いケアの提供に至るプロセス』の4つのカテゴリーが抽出された。学びのプロセスの中では学習に対する態度の変化、自尊心の変化、そしてグローバル・ナースとして実践することの重要性を感じていることが明らかになった。アクティブ・ラーニングにおいては学習者と教育者の双方からの働きかけを必要とするが、先行研究において指摘されているとおり、学士課程教育の初期における

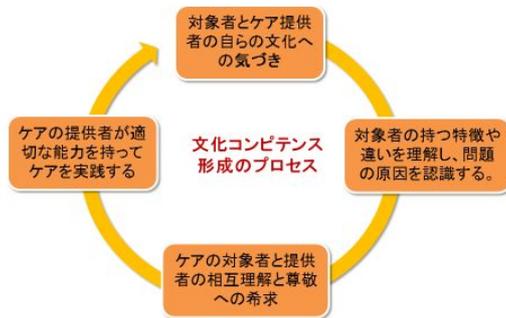
取り組みが、学習者の批判的考察能力、振り返り考察する力を高め、初年次以降の看護教育の理解を深めることを促すと考えられた。

さらに平成28年度には、ウェブサイト上で情報提供している全国の看護学部を有する大学のカリキュラムポリシーおよび、それぞれの大学における国際的な視野を育む目的で提供されている科目のシラバスより日本国内で育まれている「文化コンピテンス」についての概念を分析したところ、『ケア提供者の自らの文化への気づきをもち、国際的な環境のみならず、国内に生活する異なる文化や価値観を持つ対象者の特徴や、それによって起こる問題の要因を認識し、相互理解への希求をもって、適切なケアを実践するプロセス』と定義することができた。

さらに平成29年度においては、これまで得た質的分析のデータから尺度開発についての米国の教員よりアドバイスを受け、また米国カリフォルニア州における2週間の国際看護研修に参加した学士課程に学ぶ4年生の看護学生の研修を通して修得した「文化コンピテンス」に対する自己評価を通して国際看護教育プログラムのより適切な内容にするための示唆を得た。

これらの研究活動は、科研費研究計画書において示されている通り、「文化コンピテンス」を測定する尺度開発に必要なデータとなった。本研究により得られた研究成果は、今後の国際看護基礎教育の発展に寄与するのみならず、わが国における看護基礎教育において国際的視野をはぐむカリキュラムの作成の一助となる有益なデータとなりうると考えられる。今後さらに、質問項目の作成および尺度化、専門家会議とパイロット・スタディーによる尺度の内容妥当性の検討と修正、調査による質問項目の分析・選定を行い、「国際看護教育における『文化コンピテンス』のアセスメント手法の開発」を完成させていきたいと考えている。

文化コンピテンスの概念と形成プロセス



文化コンピテンスの属性	異文化間に存在する問題の認識	異文化を有する対象者が受ける影響や、社会が持つ問題や影響の認識	対象者が異文化の中でかかえている葛藤や問題について認識する。 異文化を有する対象者が受けている社会的差異、差別や問題の存在やその可能性を認識する。
	自らの文化に対する気づき	ケアを提供する側の自らの文化に理解 自らの文化に受容	自らの文化と相手の違いを体験する。 自らの文化を俯瞰・客観視する。 自らの文化をありのままに受け入れる。
	希求を基盤としたプロセス	ケア提供者の対象者に対する理解と尊敬への希求	異文化を有する対象者を理解したいという思いを持つ。 異文化を有する対象者の違いを受け入れる。 異なる文化に対する尊敬の念を持つ。
	質の高いケアの提供に至るプロセス	質の高いケアの提供のために適切な知識、スキル、態度を習得する。 適切な能力を持って、異文化を有する対象者へケアを実践する行為	自らの尺度では無く、異文化を持つ相手の文化尺度で考えよとする態度を持つ。 対象者の持つ特徴や違いを理解し、問題の原因を認識する為の知識を持つ。 異文化に対する継続した学びの機会を持つ。 異文化を有する対象者とのコミュニケーションのスキルを習得する。 異文化を持つ対象者のニーズの把握とそれに基づいたケアを実践する。

ポートフォリオ評価

文化コンピテンスの属性		学生の学び
異文化間に存在する問題の認識	異文化を有する対象者が受ける影響や、社会が持つ問題や影響の認識	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に対する知識がない事に気づいた。 日常的に異文化に接することがなく、異文化を意識する機会が限られている。
自らの文化に対する気づき	ケアを提供する側の自らの文化を知る	<ul style="list-style-type: none"> 自分を知らなすぎたと思う。 自国至上主義になってはいけないということ。
希求を基盤としたプロセス	ケア提供者の対象者に対する理解と尊敬への希求	<ul style="list-style-type: none"> 日本との違いを理解したいと思う。 フィリピンと日本の医療の違いについて説明できるようになる 国や言葉が異なっても、看護を通して人とつながる事が出来ると感慨深かった。 国際看護を学び続ける事の価値を認識する。
質の高いケアの提供に至るプロセス	質の高いケアの提供のために適切な知識、スキル、態度を習得する。	<ul style="list-style-type: none"> 異文化を尊重した看護は患者のアウトカムを向上させる。 差異を恐れるのではなく、差異を楽しむことからホスピタリティは生まれる。

- 因子分析による分析結果より、以下の5因子に分類。
文化の認識と異文化理解の意欲、異文化との積極的関わり、異文化理解に基づくケア、異文化の尊重、異文化教育
- パイロット評価後に、異文化教育機会を除く4因子22項目に修正を行なった。

カテゴリー	平成25年度		平成26年度	
	研修参加前 (n=28)	研修参加後 (n=23)	研修参加前 (n=22)	研修参加後 (n=22)
文化の認識と異文化理解の意欲	5.06	5.30	5.01	5.32
異文化との積極的関わり	4.95	5.21	4.80	5.15
異文化の尊重	4.67	4.77	4.70	4.82
異文化理解に基づくケア	4.67	5.10	4.90	5.25
異文化教育機会	5.23	5.48	—	—

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Oshida, Y., Sasaki, S., Learning

Experience with Active Learning Method Applied during the Early Years of Undergraduate Nursing Students: Through Global Nursing Training Course in the Philippines. Bulletin of Soka University Faculty of Nursing. Peer reviewed. Vol 1, 15-23, 2016.
<https://soka.repo.nii.ac.jp/>

〔学会発表〕(計 1 件)

忍田祐美、佐々木諭、米国国際看護研修における学びの過程と特性に関する考察、第30回日本国際保健医療学会学術大会 2015、2015年11月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

忍田 祐美 (Yumi Oshida)

創価大学・看護学部・助教

研究者番号: 00721135

(2) 研究分担者

佐々木 諭 (Satoshi Sasaki)

創価大学・看護学部・教授

研究者番号: 0463974

(3) 研究協力者

ジーン・オコンネル (Gene M. O'Connell)

University of California, San Francisco

Clinical Associate Professor

ベサニー・フェニックス (Bethany Phoenix)

University of California, San Francisco

Clinical Professor

メアリー・フォーリー (Mary Foley)

University of California, San Francisco

Clinical Professor

エンジェル・チェン (Angel Chen)

University of California, San Francisco

Clinical Professor

ロザリンド・デリッサー (Rosalind De Lisser)

University of California, San Francisco

Clinical Associate Professor